

言葉は違っても「絵」なら伝わる。
日中の子どもたちによる心の交流展覧会。

中国と日本の子どもたちの交流を「絵」を介して行うというイベントが開かれた。題して「みんな友だち ぼくの絵わたしの絵展」。日中双方で行われた展覧会は大盛況で、参加した子どもたちも大喜び。初めての試みとしては大きな成果をあげたようだ。

250点の絵に表れた、日本と中国の現在。

東京都新宿区四谷の「CCAAアートプラザ」に、日本と中国の子どもたちが描いた250点もの力作が集まった。企画したNPO法人 国際教育情報交流協会は、IT技術の活用や人的交流を通じて、日本の文化や教育の国際化促進と国際社会への貢献を図ることを目的とする組織である。

同法人の理事長代行 和田智允さんは「子どもたちの交流を考えたとき、言葉がわからなくても理解しあえるものが良いだろうということから『みんな友だち ぼくの絵わたしの絵展』を開催することになりました。2008年が日中青少年交流年でもあり日本に近いということで中国との国際交流になったのです」と、その主旨



上海で行われた展覧会の様子

を語った。

まずは子どもたちの絵をご覧ください。今回のテーマは「つくりだすよこび」だったが、子どもたちは見事に現代を表現している。中国は上海と四川の学校及び上海の日本人学校から作品を募った。時節柄、北京五輪への期待や急激に発展していく街並みなどの絵が多かった。

中国の子どもたちの絵は非常に明るくまた、どこか懐かしく、日本の昔をしのばせるような絵も多かった。また、日本のアニメの影響が色濃くでている作品もある。さらに、伝統的な水墨画を模したものもあり、さすがに中国は懐が深い。

一方、日本の作品はあかぬけていて独創性豊かだ。



中国(四川省)の子供たちが描いた作品

その筆頭が日本の最優秀作品だろう。

今回、展覧会のポスターに使われた日本の最優秀作品は猫がモチーフになっていて、頭にぞうきんや魚の骨を載せたかなりユニークなものだ。



日本の最優秀作品に選ばれた松山桃子(小学校4年)さんの作品



日本で行われた表彰式の様子

「楽しいから、毎年やって欲しい」
展覧会で聞かれた子どもたちの喜びの声。

今回の実行委員として中国側のコーディネートを担当した画家の沈光文さんは、「日本の絵は自由奔放、中国の絵には教えのようなものを感じますね。狙い通り、言葉は通じなくても絵で心が通じましたね。上海で行われた展覧会では、中国の子どもたちも大喜びしていました。毎年やって欲しいという声も聞きました」と説明してくれた。

上海での展覧会は2008年10月20日から8日間にわたり、上海市静安区文化会館で開催された。このイベントは中国上海国際芸術フェスティバル「日本週間」の一環として行われ、大々的なイベントになった。その模様はNHKテレビ・ラジオでも放送された。

「中国の子どもと、日本人学校の子どもを集めて表彰式を行いました。みんなその場でとても親しくなりました

担当者より



初回の試みとしては
大成功でした。

NPO法人 国際教育情報交流協会
理事長代行
和田智允さん

物ではなく、根源的な国際理解のためには文化的な結びつきが重要だと考えています。今回の「絵」による交流は大成功でした。今後も身近な国との交流を推進していきたいと思えます。AJOSCの助成は絵画の収集や展示費などに使わせていただき、おかげさまで250点もの作品が集まり、成果の大きい展覧会を開催することができました。

よ」と沈さん。準備期間があまりなかったため、絵の手配には相当の苦労があったようだが、それを忘れさせるほどの成果があったという。

また日本では、翌年1月25日に表彰式が行われ、26日から2月5日まで前述のアートプラザで展覧会を開催。さらに4月には東京・渋谷にあるNHK放送センターの「みんなの広場ふれあいホール」で展覧会が開かれた。アートプラザには1,400人が来場して作品を鑑賞したが、会場の規模からいえばかなりの盛況ぶりだったといえるだろう。

「ただ、予算の都合で中国の子どもたちを招くことができなかったことが心残りでした」と和田さんが言うようにいくつかの点で課題は残ったようだが、今後の取り組みへの方向性ができてきたようだ。

「こうして子どもたちがふれあうということは将来に向けて大切な種を蒔いたこととなります。絵を通じて結ばれた子どもたちが大人になった頃、本当の意味での友好関係が築かれればいいと思います」(和田さん)

翌年度はタイとの交流を行う予定である。スマトラ沖地震による津波被害の爪痕がまだ残る地域だ。このイベントがタイの子どもたちの激励に少しでもつなげれば嬉しいと同法人では期待している。